

／旬の彩スペシヤル！／

子どもたちの感受性をどう育て育むか

飛騨高山、山間の集落に足を踏み入れると、「オークヴィレッジ」がありました。「サステナブル（持続可能な）」という言葉が声高に叫ばれる昨今ですが、日本の暮らしは古来より里山と共にあり、そこでは人と自然が共存してきたのです。いまから半世紀近く前、東京から岐阜県高山市清見町に移り住んだのは、稲本正さんを始めとする5人のオークヴィレッジ創業メンバー。循環型社会のロールモデルとして常に時代をリードしてきたその歩みを確かめることから、今回の「旬の彩」は始まります。

撮影／若井 進 取材・文 橋 雅康 構成／中井美沙

百年育ってきた木で、百年使える家や家具を造る

「木工芸とは何か、私たちの暮らしに適したモノ造りはどうあるべきなのか。これからもずっと考え続けていきますよ」と上野さん。オークヴィレッジの歩みについて伺いました。

オークヴィレッジとしての始まりは、高山市にあった一軒の農家の納屋からでした。時は1973年のオイルショックの頃です。飛騨高山の木工メーカーでは大リストラが敢行されるというのに、東京から家具製造をやりたいと若者たちがやって来たわけです。それから、あまりに無謀だと大きな話題になったほどです。工芸村を作るために場所を探すが、ここは別荘地として分譲されていたものの、実は買い手がつかなかった土地なんです。運よく8000坪の山林を購入しましたが、何と向かいの場所には養豚場などの建設予定があると「言うではないですか。その時に、俳優の菅原太太さんがここを別荘地に購入してくださいました。」

時にお見えになって、「売れ残った製品は全部俺が引き取るよ」と言ってくれたそうです。菅原さんご自身は旧軽井沢に別荘をお持ちでしたが、当時は「俳優の別荘を見に行こう」といった旅行ツアーなどもあり、「ゆつくり静養もできないから、どこかいい所がないかな」と弊社創業者の稲本が相談を受け、「うちの隣が空いていますか？如何ですか」と勧めたところ、わざわざ清見村まで見に来て気に入ってくださり、邸宅の施工も弊社にお任せくださいました。菅原さんが病気になられた時、新幹線も通って交通至便の軽井沢で静養されるのですが、その時に「君たちがここを買わないか」とお声掛けをいただき、弊社で買い取ることにしました。現在、菅原邸はそのまま社員寮として活用させていただいています。早くから環境問題などに取り組みれていた脚本家の倉本聰さんや作家のC.Wニコルさ



スペシヤル・インタビュー

建築家／オークヴィレッジ代表取締役

上野英二さん

FILE.37

などと親交があったことも本当にありがたいことでした。オークヴィレッジが立ち上がった時、私自身はまだ高校3年生でした。その後、名古屋の大学で建築を学び設計事務所で勤め始めますが、その頃に初めて松坂屋でオークヴィレッジの家具展を見て感動したのを憶えています。稲本と出会い色々話をする中で、「うちは『お椀から建物まで』というコンセプトで建築するけど、大工はいても設計する者がいないから困っている」と言うわけです。初対面の私にですよ（笑）。「富山県の田圃の中にする一軒の喫茶店と、名古屋のビルテナントの一室で喫茶店を作る内装を手掛けてほしい」と。

私は飛騨の出身で、幼い頃から身近に木工業がありました。興味があったのは京都や奈良の古い神社仏閣でしたから、当時流行り始めていた鉄骨やコンクリート、ガラスやステンレス、ビニールクロスや合板といった建材ではなく、土壁や漆喰、無垢材を使った木造建築の設計をしたいと思っていました。ただ、この先、本当に好きな木造建築というスタイルで生きていけるのかと思いついて、まさにそんな時の稲本との出会いだったんです。オークヴィレッジの建築部門として本格的に加わったのが創設から10年目の1985年、高山に帰ってきてもう37年目になります。今こそ、森や海を大切にしたり、自然と共存する持続可能な循環型社会の実現をと声高に叫ばれたりしています。が、高度経済成長期以降というの、物があふれ現代建築が全盛となる頃です。そうした中で環境負荷のかわらない自然素材である木が好きだと

も多い世の中ですが、近年そういった中でも大切なことに気が始めた方が増え始めたように思います。オークヴィレッジとして40年近く前に時いた種が、ようやく大樹となり実ってきた感を抱いています。うちの建てた家に家族で見に来られると、初めはおとなしかった子どもたちが必ず靴下を脱いで家の中を走り始めます。キフキフとした瞳で、その顔がまたいいんですね。子どもたちというのは、本能的に何か良いのかを察知しているように思います。それだけに、安心して安全なもの、シンプルで洗練されたデザインのものに、子どもたちが慣れ親しむことができるよう、親が環境を整えてあげることが大切です。素材感や心地よい匂いというのはちゃんと五感を通じて記憶に残ります。モノを使うと愛着がわき、経年変化もまたきつと素敵に思いつい出るはずですよ。

うえの・えいじ
1959年、岐阜県生まれ。1985年よりオークヴィレッジに所属。以後、地元の木の魅力を活かした建築を実践し続ける。手掛けた物件はメディアなどでも注目を集め、建築系雑誌に多数紹介されている。